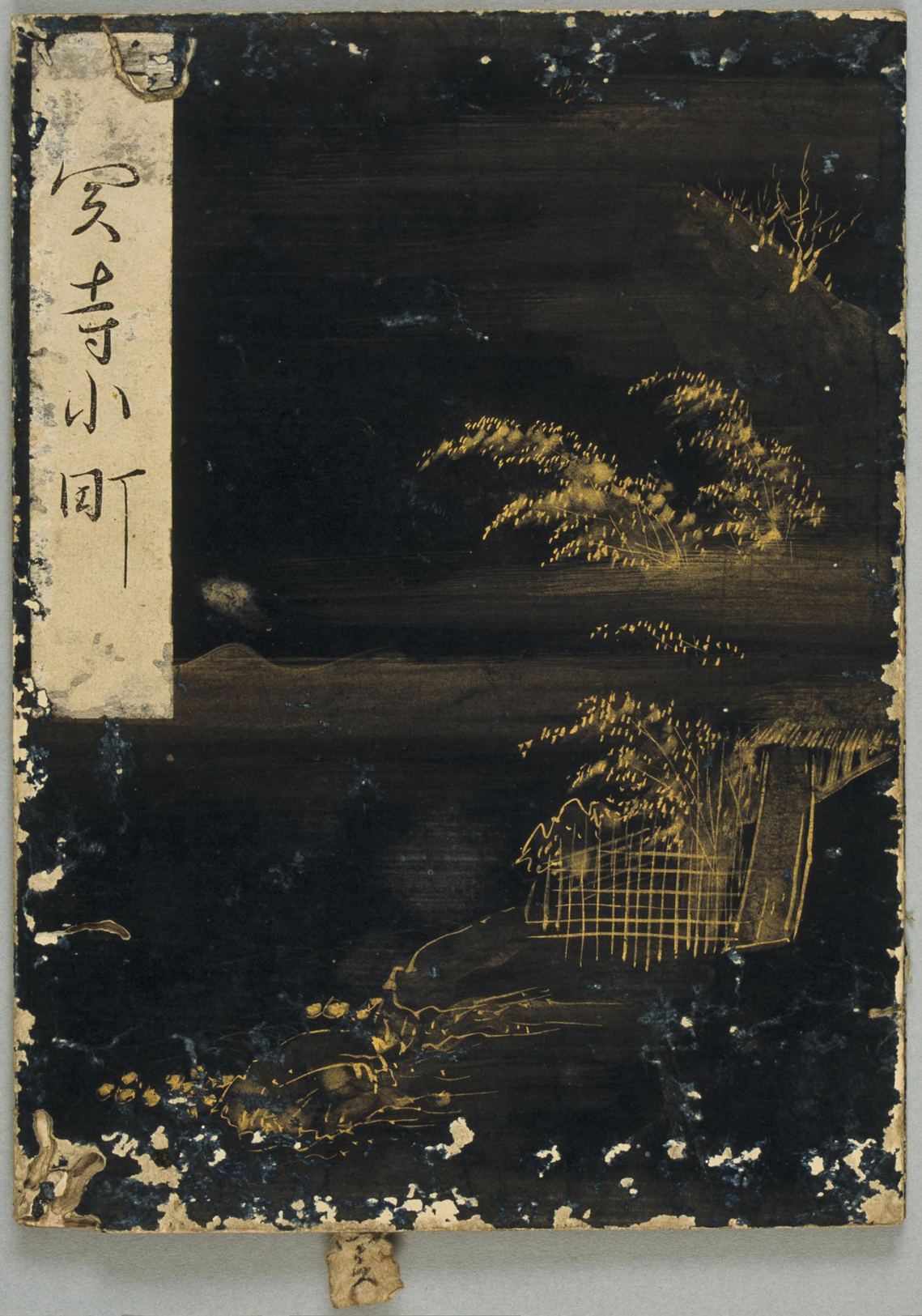


観世流謡曲　元和卯月本　30-001　30　関寺小町　国立国会図書館

次第

侍ひとくに成うれしやすかの里乃
まひりをとゝ月晴豊ハ江州
岡寺乃住僧しそくぎをハ七月
七日ゝてはほうこみるく海堂
の庭よりてだをうつ乃拳をそな
をこゝるにはゞ此山陰よ者女衆
菴をみとりて舞道をきいめ

19.9.25 国会図

観世流謡曲　元和卯月本　30-002　30　関寺小町　国立国会図書館

たるよりい[illegible]をかたりおきしをも
ともあれや[illegible]女乃物語をも
聞うやとなれ　乃つくしおれ
濃風と袁賢と一時よ来るとも
ちさ乃七日のゆへよ早ちりぬ
[illegible]き乃織姫の辛向とて[illegible]行呂律
乃ふろくよ　[illegible]と盡して

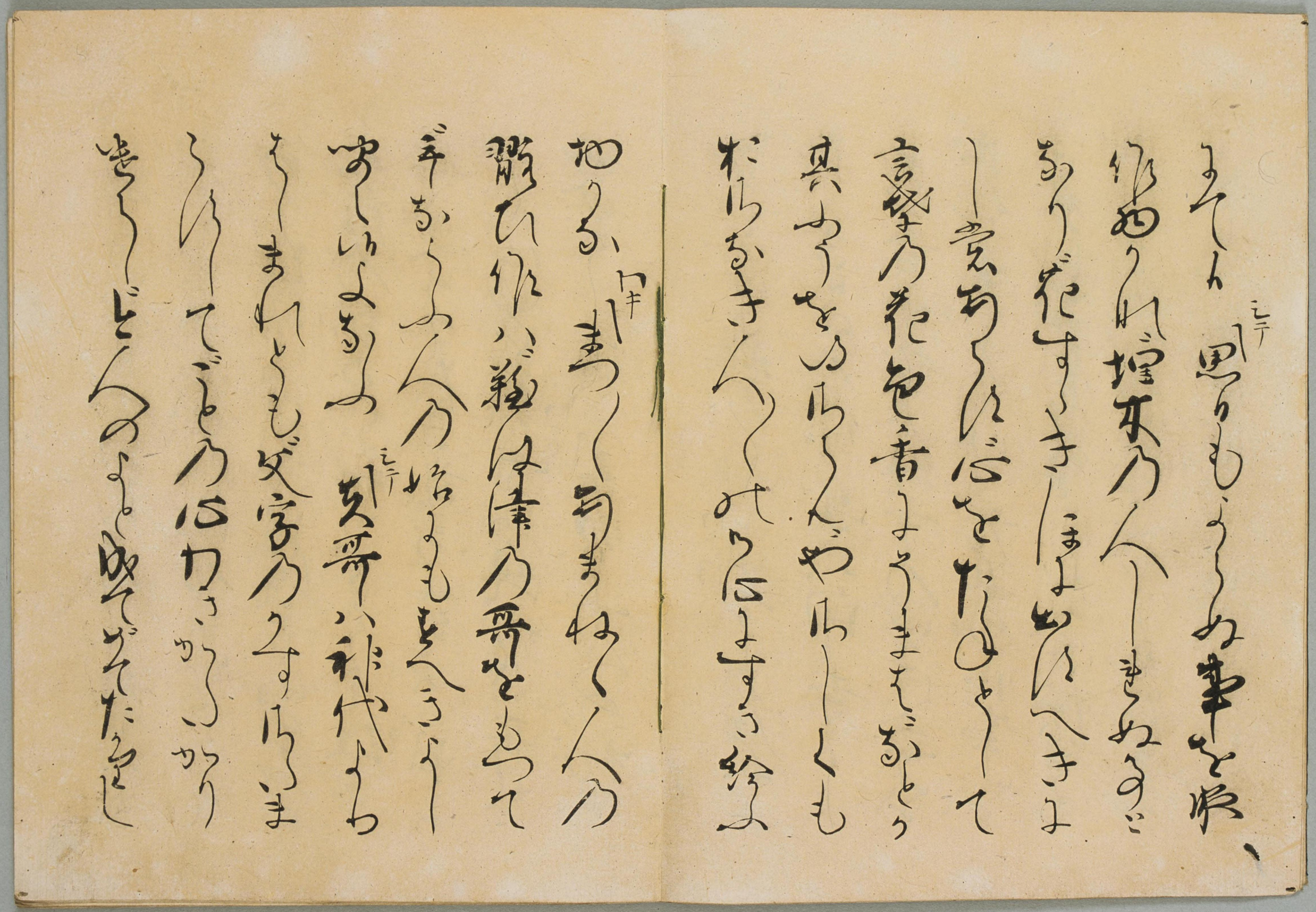
[illegible]　上三句　道をはるかにてくし
織やまきの乃ちくさ薄華をも
うへて秋草の露乃むしとかき
るはれ松風まてもすかから乃
辛向よかるのゆへよ色ふかく
[illegible]　たよ一鉢をふりたて歌るよ
たうしは[illegible]をかくれ

観世流謡曲　元和卯月本　30-004　30　関寺小町　国立国会図書館

それもどきぬ
ものよだちあり
花は雨乃ふるよりて紅葉ま
ちよりおしむ柳は風よりあさむ
かるそのみちやうやくたちわづ
更よりてきき事なし終よは老乃
学乃ゆ物ちの乃ちいらしともし
中
ぜうよ歩る秋はるふし蓮ゆし

かう寝ちやくく
中月
ゆよ老女よ
ゆへきる乃作ゆ是ハ関寺乃
ちゑ者ゆて小野寺乃児達舞を
市姫書ゆていろ老女の所事を
ゆ及い給ひ天をよむへき様をも
ゆ及ひ給ひ天をよむへき様をも
ゆひよう西語をもうゆたまハ
ゆ為よ見たちも是ゆ出ゆそ

観世流謡曲　元和卯月本　30-005　30　関寺小町　国立国会図書館



そもそも思ひもよらぬ事を承り、
仏の御堂の人々きやうのすぢ
なりと花すきほどに出へきよ
しと云ひしかをたのもとして
言葉の花色香よそまさるとう
真かうをかしやんやらしくも
おぼゆるよすがの給ふ
なるまつとの人の
散しかはの難はの津の舞をもて
ぞおもふふの乃姫もえさう
やしいよるの　実舞ハ神代より
さまれともかの字のうすはるま
うけてごとの乃はかさかりか
きりどんのよとぞそたる

よつきをよろんおたかめ　謡哥な
きたいうて　秘伝清乃ゑをもて
ちうひん　まうす清音山のゑい
だ君乃うをやうくもて　はうり
ぶしゑめそたき　謡ゑよるゑ　きよ
ゑ　ゆうたいうつ此うる哥を
ゑ　ゆうたいうつ　辛羽ゑんの初と
ゑ　ゆうて　高きいやしきんをも
乃ん　都鄙を国乃ちるんや
ゑ　ゆうこと乃うきゑまくも
ゑ　ゆうきるゑ　ちうつこ乃うゑの
ゑ　ゆうやちゑの　生形いけるを
濱乃真砂いつくともをつと
の世いかも盡し　書柳の色を

観世流謡曲　元和卯月本　30-006　30　関寺小町　国立国会図書館

松乃梢のちりまがひ
おほしめせだにも時つとこと
ばとも此哥乃文字あるを事乃
跡もつきをしへ給ふ御ふい
ぶるこゝろの言葉ゝとこゝも
哥乃哥ハまれるを老女乃事
たりをるゆへ我をこか

をくきもりうたの始末
ゆるまれをくきるを見ぬ女の
哥作乃是ハ古歌通姫乃ゆ也
歌通姫とハ少将を天皇の后
ゆくまゝ乃ゆゑ乃ことを和
らも異流をとゝ学れ作へ
梅ハ歌通姫の流をまねぶ物乃

ど申したる小野小町こそ衣
通姫乃流とハ侘びぬれハ
ミをうき草乃根をたえてさそふ
水あらハいなんとそ思ふとよミしハ
小町乃哥作るか是ハ大江の惟明か
心の色をしほらず常かうか
又しよ文屋乃康秀か三河の守よ

成てくたりし時田舎よく心
をもさそハれぬよしにて和歌をよミし
し福よまれしうつ世ミまて
年を経し物をきをハ涙乃かゝる
身乃又思ひつゝかゝるしるよ
かきやるかひぬれゝ乃おはつか
よみたらんしと覚えす衣通姫乃

流と申しつるも小町なりし實方
目をとゞめつる老女ハもしよ
其ふと云ハ卿小町のなりはてなる
とも、いまハ此世にあるへきなれハ
どハ歳の前もなく御年ハ小町の
あそうとよ忍のさなつうらそれそ
呼よいや小町とハなつかしやいろ

見えでとよみしものを
上三下
うつろふ物ハ世乃人の心の
花やこゝろもおもひつゝや侘ぬれハ
身を浮草の根をたえて誘ふ
水あらハいなんもハなるましとそ思ふ
クリ地
あらしや實やつゝめとも袖よ
たまらぬ玉ハ人をうらみの

涙の雨ぞふることの草の
花さほきたるえのもとてまく付
きう露の名おもんぜ心つ
めれもわんのはてつんとどの
きもとはえの色よるかく寺
ぬる年月をど学ぶ出てきる
秋の露は霜来て寒雲

せしの音しかまきうち生命
既よかきわとるてたる槿花
一日の栄よかるる有ふる
なきい枝をの学れる
きの日まく歌をし詠
事雲秋おしぶまて草の
花散し堂れてもおきる

露乃命はきうの音や
きのうの八ゝへのすゑと雲
しはらくもとゝまる事よあわ
行方をゝそ〻ろ八ゝ乃
者うらしきこゑ雲八
と長ゝ宿まてもだ
まをかたらはうさ
ゝ命花とうを

ゝ八水精をつゝ鶯樂屋車
乃衣の色をかゝ
枕つゝまや乃うちよりて花
のまき乃きゝ乃たきつし
はしるけとも乃
やをきつゝ
岡寺乃鐘のこゑ諸行無常と

上ニテ

ゆるされし者はよハやくもなし
逢坂乃山の是生滅法のこと
りわきまへしらず飛花落葉乃
折々ハすける道とて草の
戸に硯をならしつゝ筆をそめて
もしほ草かきやることの葉もかれ
かれにあハれなるやうにてつよ

からずつよからぬハ婦乃哥なれハ
いとゞ老の身のよハりゆく果そ
かなしき　むかしハ衣通姫の流
いらぬ老女とも伴ひ給へ　如子
老女だにいくのまつりをとひきて
所縁く　いやし老女の身ハ
ちかつきて猶よみ道もよしなく

けふ乃るしはへきかなくらん
とよ　七夕乃織糸竹乃手向草
いくとせてかわらのそのいく
小町乃百年よ月やあきふる星
あひの雲乃うへ人になれし
袖も今はあさ衣乃あさましや
くつやめもあてられぬ着様
ぞそも今宵はたなはたの
手向乃数も色々のあふれは
糸竹よかきそへていろをひさの
声をとうき袖は童舞乃袖そで
おもしろきにましまする呉竹の
よをへても遊び行末乃
乃ぞ萬歳楽　あら面白乃今の

まことの神やるぞ、昔豊のあるこの
幕のまことの姫の神こそ五度迄
たしかに見ぬ又七夕の手向の神
あるこそ七夕、まそてやあるべき
相人こそまこと相人も老宿と
やとの豊年の神ぞまそて
相人こそ百年ハ

上句三百年ハ花よりやとわし胡蝶の舞
上句ちりぬるかぎりくく春の花の枝
下ニテ月を神も手ぬ上句もとめ
よくく下ニテ立舞
祝ハ元ハ月かくもとも昔よりぬ
そそハちそそ上ニテ若宮の
上句ぞよ元ハ月ニ下ニテ
月祝よちそ松乃

見しうれしや明うる乃開寺乃
ゆ　鳥もきなきつるよ　つきを
たる東雲乃あけまもなくて
なくなくもとのしゝ　なくれも
もあるじいとゝ　留て留そて
枝をうつてよろゝとぞなる
夏屋よりのうり　きわ百年乃
嬉ときなくこ　小町り墨乃
名ゝ　ゝ　ゝ

観世流謡曲　元和卯月本　30-015　30　関寺小町　国立国会図書館

右百番之本者紫式部
侍石岡が左手ニ章句付
依波板紙ニ彩色ヲ清書
加奥書ヲ墨筆

元和六年　観世左近大夫
卯月日　首尾

観世流謡曲　元和卯月本　30-016　30　関寺小町　国立国会図書館

観世流謡曲　元和卯月本　30-017　30　関寺小町　国立国会図書館